

中南勢地域における初期群集墳の検討

～小谷古墳群の評価をめぐって～

豊田 祥三

はじめに

小谷13号墳は本報告のとおり埴輪をもち、短甲をはじめ多数の鉄製品・埴輪をもつなど、副葬品の内容、立地などを含め、古墳群内で突出した内容をもつ古墳である。出土遺物より築造時期は古墳時代中期中葉と考えられるが、当該期、伊勢地域では宝塚1号墳に代表されるような大型の前方後円墳が築造されなくなり中小の古墳が中心となる時期である。小谷古墳群をはじめ、いわゆる「初期群集墳⁽¹⁾」に位置付けられる古墳が築造されるのも概ねこの時期であり、古墳時代後期に爆発的に築造される群集墳より先行するこれらの古墳は群集墳の発生契機と、当時の社会情勢の変化を表すものとして重要である。近年は、こういった小型墳の出現の背景を、大和政権による地域の下位層までを取り込んだ支配関係の成立によるものとの見解が主流である。

しかし、初期群集墳そのものの検討は調査例の多い近畿地方のものが多く、その周辺地域のものについての研究は始まったばかりである。また、築造背景についても政治的背景を強調するあまり、被葬者の性格についての検討も十分に検討がなされてきたとはいえない。また「初期群集墳」という概念も研究者間での一致をみていない。

また、中期中葉～末葉に造営された初期群集墳は横穴式石室をもつ後期の群集墳に連続していないことが多く、後期群集墳との間に断絶が認められることが指摘されている⁽²⁾。木棺直葬の小型墳群と横穴式石室を主体とした後期群集墳の被葬者との間には被葬者の社会的地位の変質が生じていたと想定される。「初期群集墳」についてはその呼称でひとくくりには出来ない複雑な問題を内包しており、より詳細なレベルでの検討が必要であると考ええる。

ここでは、小型墳のなかでも小谷古墳群を始めとした中・南勢地域で古墳時代中期中・後葉に築造された、ないしは築造が開始された初現期のものに焦点をあて、古墳群の展開のありかた、副葬品・祭祀

形態といった諸要素の比較・検討を行いながら被葬者の性質の変化を検討するとともに、新たに時期を隔てて発生する群集墳との差異、周辺の首長墳との関連性からこの地域における初期群集墳の成立とその背景について検討したい。なお本稿における年代観については田辺昭三氏による須恵器編年に依拠⁽³⁾する。

1 中南勢地域における初期群集墳

南勢地域の群集墳について検討した竹内英昭氏は、初源期の群集墳の開始期についてT K 208型式（以下「型式」を省略）段階、T K 23～T K 47段階（中期末葉）、M T 15～T K 10段階（後期前葉）と一様ではないことを指摘している⁽⁴⁾が、ここでは古墳時代中期中葉～後葉（T K 216～T K 208段階）に始まる古墳群に焦点をあてる。中南勢地域で中期中葉に築造、ないしは築造が開始された群集墳の調査例はあまり多くはないが4例みられる。以下簡単に各古墳群の概略について触れておく。

① 小谷古墳群

雲出川支流の中村川左岸の丘陵上に位置する36基から構成される古墳群で、南支群の6基、東支群の6基、北支群の2基が調査された⁽⁵⁾。詳細は報告で触れられているので繰り返さないが、主だった特徴をあげると以下の点が挙げられる。

古墳群の初現はT K 216段階に東支群の丘陵上の最も見晴らしの良い箇所、短甲をはじめ鉄製の武器・武具が多く埋葬された13号墳が単独で築造される。墳丘には埴輪をもつ。T K 208段階には南支群において方墳である32号墳が、北支群には方墳と考えられる28号墳が築造され、T K 23段階の29号墳は円墳で埴輪をもつ。

M T 15段階に11号墳が築かれ、それ以降9・10・12・24号墳が相次いで築かれ造営のピークを迎える。13号・11号墳を除いては木棺木口部分に泥岩の立石を用いている。

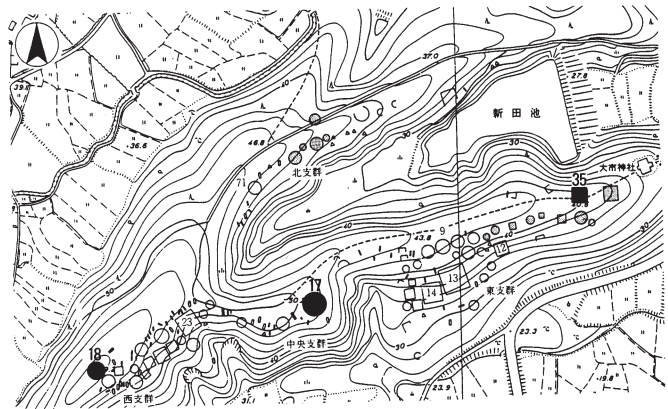
13号墳とM T 15段階以降の他の古墳では、木棺直



第102図 小谷古墳群 (S = 1 / 2, 000)



第103図 八重田古墳群 (S = 1 / 12, 000)



第104図 平田古墳群 (S = 1 / 6, 000)



第105図 落合古墳群 (S = 1 / 10, 000)

葬という点では共通するが、埴輪の有無、木棺木口部分の板石の有無、須恵器が墓壙・棺内に副葬される点、追葬が頻繁に行われている点などで異なる要素が多く認められ、墓域は同一であるが被葬者の系譜が同じとは言い難く、断絶がみられる。またTK43段階には土壙墓もつくられていることも注意が必要ある。

②平田古墳群

安濃川流域に存在する⁶⁾。古墳群の全面発掘調査がおこなわれた例として著名である。東支群ではTK208段階に35号墳が築造されたのに始まり、TK47～MT15段階の18号墳・17号墳には竪穴系横口式石室が導入される。以降は7世紀に築造のピークを迎え、渡来文化の影響が色濃くみられるようになるのが特徴である。

③八重田古墳群

阪内川左岸流域の丘陵上に存在する25基からなる古墳群⁷⁾である。古墳時代前期から中期前半にかけては1号墳や8号墳といった地域の累代墓と考えられる古墳が築かれるが、TK208段階になると西側の尾根筋に突如として小型の方墳ばかりの一群が出現する。小型の方墳であるが16号墳からは眉庇付冑や短甲、鉄刀、鉄鏃など豊富な副葬品が出土している。古墳群はTK23～TK47段階に造営のピークを迎え、TK10段階を最後に造営は終了する。

④落合古墳群

宮川右岸の丘陵上に位置する。発掘調査により10基が確認⁸⁾されている。古墳群の発生は4世紀末ないしは5世紀初頭の7号墳に始まる。古墳群の最盛期はTK208段階で、鉄刀や鉄鏃など多くの鉄製品が出土した3号墳をはじめ6基が造営されている。古墳群は以後も数基築造されるが、MT15段階をもって終焉する。

2 初期群集墳の比較検討

a 築造過程

各古墳群の形成過程をみると、ある特定の1基の古墳が単独で築造されてから、若干の空白期間を経て造営がはじまるパターンと、前代から古墳が築造されているにもかかわらず、突如として小型の墳墓が群をなして形成されるパターンとに区分できる。前者が小谷古墳群・平田古墳群で、後者は八重田古

墳群、落合古墳群である。

前者のパターンの「特定の1基」とは、小谷古墳群でいう13号墳、平田古墳群の35号墳に相当する。これらは後続する古墳と墓域は同じではあるものの、埋葬施設や葬送儀礼が異なることから、より単独墳としての性格が強いと考えられる。とりわけ小谷古墳群では各支群ごとに1基みられることは注目される。

八重田古墳群については先にも触れたように、前期以来首長墳と考えられる古墳が累代的に築造していたが、TK208段階に小型の方墳群が突如出現する。落合古墳群については周辺で首長墓の存在は不明であるが5世紀初頭前後に最初に7号墳が築造される。しかし、小型の方墳が群をなして築造されるのはTK208段階であることや、伊藤裕偉氏が指摘⁹⁾するように古墳群の初現となる7号墳が最高所に占地せず、後に築かれる3号墳が尾根上の一番良好な場所に築造されていることなどから、3号墳を中心としたTK208段階前後の古墳群の優位性が窺え、7号墳の被葬者とは系譜を異にすると考えられる。

八重田古墳群の方墳群と落合古墳群の一部はTK208段階にまとめて築造され、最盛期を迎えることから集団墓としての性格が強いが、小谷13・28・32号墳や平田35号墳に関しては単独的に築造されており、短期間で数基がまとめて築造された八重田、落合例とは区別して考える必要がある。

b 墳形

墳形の問題は被葬者の出自差と関連して重要視されるが、小谷古墳群においては南支群の32号墳、北支群の28号墳が方墳であるが13号墳は円墳である。一方、平田古墳群は初現の35号墳が方墳であるのに対し、次段階に築造される18号墳は円墳に転換している。同様のことは、落合、八重田古墳群でも確認でき、森泰通氏¹⁰⁾は「南勢の場合、その多くは概ねTK23段階頃に方墳から円墳へと墳形を転換するらしい」と指摘している。和田晴吾氏は、「墳丘の円墳化」という点に、群集墳に先行する小型墳墓群と「古式（初期）群集墳」の違いを設定し、ヤマト政権の有力家長層の直接的な掌握の第1段階であると指摘¹¹⁾しており、他の群集墳よりも先行して円墳が採用された小谷13号墳の存在は他の例とやや様相を

古墳	墳形	規模	甲	冑	剣	刀	鉾	槍	鏃	刀子	鏃	鉾	斧	鋤	鎌	勾玉	玉類	埴輪	時期
平田35号	方	12			2				30	2	1		2	1			○		T K216
小谷13号(1)	円	16	○		4	1			12	1			2		1		○	○	T K216
小谷28号	方	8				1			5										T K208
小谷9号(2)	円	13							30	5							○		T K10 ~ M T85
小谷9号(4)	円	13							6										T K10 ~ M T85
小谷10号(1)	円	16				1			5	2							○	?	T K10 ~ M T85
小谷11号(2)	円	12							1										T K43
八重田16	方	16	○	○		2	1	2	43				2				○	○	T K216
八重田19	方	10			1				15			2	1						T K208
八重田20	方	12			1														T K208
八重田7号	円	14				2				1			1					○	中期末葉
落合3号	方	11			2	1	1		14	4		1					○		T K208
落合8号	方	6			1					1									T K216 ~ T K208
落合10号(1)	方	5							23	1		1					○	○	T K216 ~ T K208
落合5号(1)	方	10			1				20	1									T K208 ~ T K23
落合2号	円	11				1			9	1									T K47
落合4号	円	9				1				3									T K23
落合1号	円	13								3									M T15
常光坊谷4号	円	17				1												○	T K47

第70表 小型墳の副葬品一覧表

異にし、注目される要素といえよう。

c 副葬品

先に挙げた古墳群の副葬品の組成とその数についてまとめたのが第70表である。初期群集墳のなかで核となる古墳の副葬品を比較してみると、武器・農耕具といった鉄製品を多く含むのが特徴である。このなかで甲冑を有していたのは小谷13号墳と八重田16号墳のみであるが、甲冑の有無を除けば、副葬品の組成に目立った差異は認められない。

一般的に甲冑については、中央政権から配布されたとされる。入手の経路がどうであれ、当該期に甲冑や刀剣といった鉄製品が容易に入手出来たとは考えにくく、入手するには上位集団との接触は不可欠であろう。しかし、首長墳に相当するような大型の古墳でも甲冑を有しない例もあり、甲冑を有する古墳が階層的に上位とは限らないと思われる。

また、当該期に群をなして築造される八重田・落合古墳群内においては1基のみ副葬品が豊富な古墳が存在する一方で、鉄刀や鉄剣を有しない古墳も存在するなど重層的とはいわないまでも被葬者の優劣が古墳群内で認められることは注意されてよい。

小谷13号墳では、鍋子状鉄製品といった渡来系とされる遺物が副葬されているものの、その主体となるものではない。また、埴輪の樹立や木棺直葬である点など前期古墳の系譜をひく要素がみられること

から、中期中葉段階ではこれらの古墳が渡来系の集団の墳墓である可能性は低い。

一方で、T K23段階以降の古墳には、引き続き鉄製品などが副葬されるものの、その内容は全体的に貧弱で、豊富な副葬品をもつ古墳は皆無である。

d 埋葬施設と複次葬について

小谷古墳群、八重田古墳群、落合古墳群とも木棺直葬墳を主体とする。平田古墳群は35号墳には木棺直葬を用いているもののT K47段階になると18・17号墳には竪穴系横口式石室が導入されている。竪穴系横口式石室の出自については北部九州であるとされるが、渡来系の文化の流入は想起できよう。

また、小谷古墳群では13・11号墳の段階には埋葬施設は2基みられたが、後続する10号墳からは3基の埋葬施設が、9号墳には5基確認され、複次葬が頻繁に行われている。さらに9・10・12・24号墳の木口部分には泥岩製の板石がみられ、埋葬者の頭位もすべて東位になるなど埋葬形態に関しては均質的であり、同一支群ではあるが13号墳の被葬者との連続性には乏しく、断絶がみられる。

八重田古墳群においては終始単次葬である。落合古墳群においてはT K208段階の築造である10号墳において3基の埋葬施設が確認されているがそのうちの1基は後のものとみられる。

e 須恵器祭祀について

小谷13号墳では墳丘上からTK216段階の須恵器が小片となって出土している。楠本哲夫氏は、八重田16号墳、平田35号墳の須恵器について「液体をいれる容器、飲み干す高杯・液体を高杯に注ぐ把手付碗などがセットでみられ、それらの一部は意識的に破砕されており、墓前での飲食儀礼、「食い別れ」行為の存在を示す」とし、TK208段階には「須恵器を使用するある種完成された墳墓祭式のひとつが既に出現していたのであろう」との重要な指摘¹³⁾をされている。

事実、小谷13号墳、落合3号墳からも把手付碗と考えられる破片が出土しており、類似した器種構成をもつ。また、八重田16号墳の高杯の杯部には長方形の透し孔が穿たれ、小谷13号墳の広口壺には焼成後底部に穿孔されており、「非実用」のものであったと考えられる須恵器が使用されている。個々の古墳で古式の須恵器を用いる共通の祭祀が行われていたことが窺え、同時期の築造である神前山1号墳のような首長墳でも同様の祭祀がおこなわれている¹⁴⁾。

ところが、小谷古墳群では墳頂上ないしは周溝内で須恵器を用いた祭祀は次段階になると様相が変化し、代わって須恵器の墓壇内副葬が登場する。

小谷11号墳では墓壇内に須恵器が埋葬されるようになり、10号・9・24・12号墳にも埋葬されている。しかし、引き続き木棺直葬墳が築造されている八重田古墳群では墓壇内に須恵器は埋葬されないにもかかわらず、中期末葉以降から築造が開始され、横穴式石室を導入する常光坊谷古墳群、浅間古墳群には須恵器の墓壇内埋葬は顕著に認められるようになるのである。この須恵器の墓壇内祭祀は横穴式石室の導入に伴って登場する祭祀とされ、この祭祀を受容しなかった八重田古墳群は小谷古墳群よりも先に造営が終了している。

f 埴輪

埴輪の使用が確認できた古墳は小谷13号墳、八重田16号墳のみで、甲冑をもつような古墳群内で核となる古墳に埴輪の使用がみられる。小谷古墳群では13号墳に併行ないしはやや後出する32・28号墳では埴輪はもたず、八重田古墳群でも16号墳は埴輪をもつが19号・20号墳にはない。中期後葉段階では埴輪を樹立できる階層は限られていたことが窺える。一

方、落合古墳群や平田古墳群では、一貫して埴輪は使用されていない。

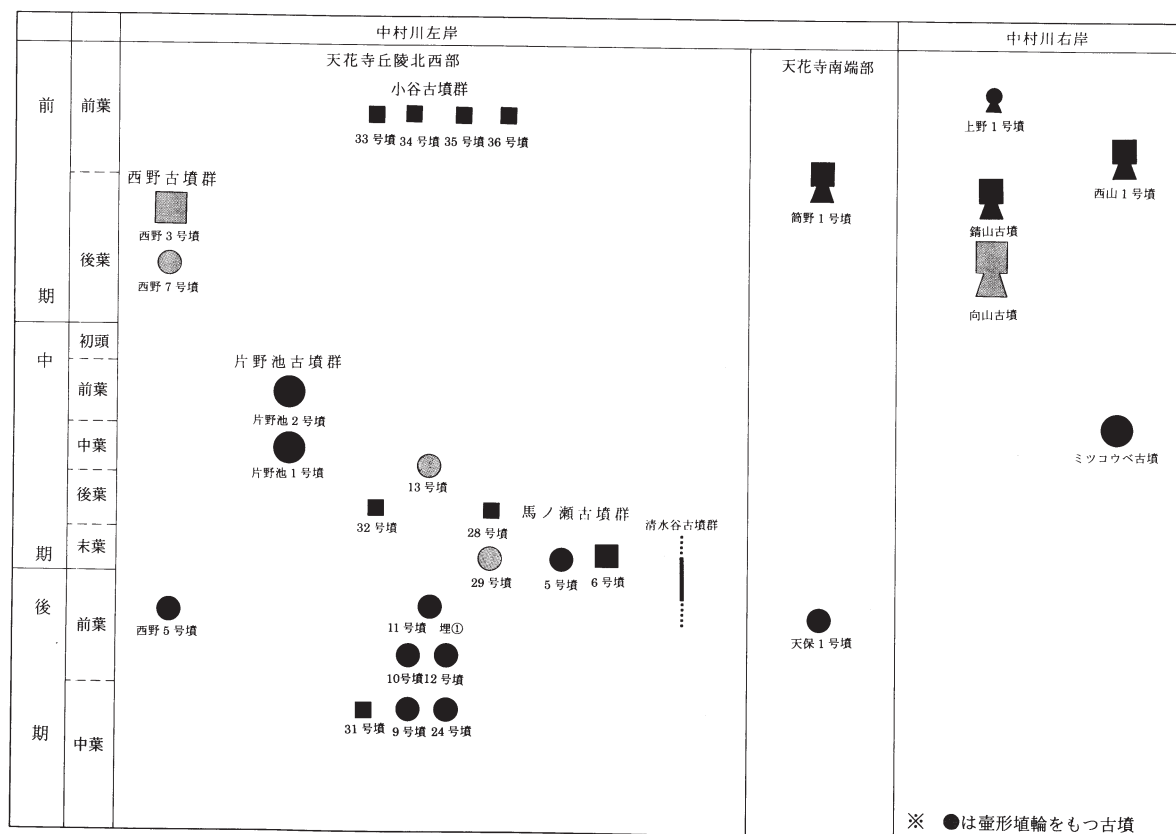
中期末葉段階以降になると、埋葬施設が木棺直葬の古墳群で埴輪の樹立が多くみられるようになるの、横穴式石室をもつ古墳には埴輪が樹立されないことを考慮すると、埴輪の有無は、被葬者の出自の系譜差もその一つの要因と考えられる。

3 被葬者の変質について

各古墳群内を様々な要素から比較してきた。主だった特徴をみると、中期中～後葉には小型墳であるにもかかわらず甲冑・刀剣類など豊富な副葬品をもち、群中で核となる古墳が築造され、墳頂部ないし周溝においては埴輪や、古手の須恵器を用いた共通した祭祀がおこなわれていたとみられる点など共通した要素が多い。これらの核となるような古墳は、副葬品の内容や埴輪の樹立など、首長墳の小型版ともいふべき内容をもち、その被葬者は当時、社会的に上位の地位にあったと考えられる。

しかし、これらの古墳群は次段階にも古墳は築かれるものの、埋葬施設や須恵器を用いた祭祀が変化する。また、副葬品などのレベルも低下し、核となるような突出した内容をもつものはみられなくなり、古墳間の格差が無くなり徐々に均一化していく様子が窺え、より家族墓的な様相に近くなる。例えば、小谷古墳群においては、次段階になると、埋葬施設に板石が用いられ、埋葬頭位も変化した、複次葬が頻繁になる。副葬品も鉄製品を一定量含むが、馬具や金銅製品などは含まれず、13号墳に匹敵またはこれを凌駕するような古墳は皆無で、八重田古墳群に関してもTK23段階以降にも引き続き古墳は築造されるが、16号墳と同等の副葬品をもつ古墳はみられない。

中期末葉は新たに展開を始める古墳群が増加し、それに伴い小型墳も増加する時期である。これらの古墳群は、埋没古墳も多いため副葬品が不明な例が多いが、木棺直葬墳で埴輪をもつ古墳が多いのが特徴的である。常光坊谷古墳群¹⁵⁾や舞出北古墳群¹⁶⁾では、埴輪をもち、核となるような古墳は存在するが、豊富な副葬品をもつ古墳はない。須恵器生産と連動して、埴輪の生産が拡大したこともその要因の一つであるが、中期中～後葉の段階には群中の核となるよ



第106図 天花寺丘陵周辺における古墳の消長

うな古墳にしか埴輪は樹立されておらず、埴輪が樹立できた階層は限定されていたが、中期末葉になると小型墳でも埴輪を採用する古墳が多くなり埴輪祭祀が一般化したと考えられる。

以上のことから中期中～後葉段階の古墳と中期末葉段階の古墳とでは、小型墳の増加、副葬品や埴輪の採用の違いから、被葬者の社会的地位に格差が存在しているものと思われ、連続して捉えられるものではないと考えられる。前者は古墳間の格差が強く認められ、中期古墳の首長墳に準ずる核となる古墳が存在するが、後者は古墳間の格差は存在するものの、中期中～後葉ほど突出する古墳がないことから¹⁶⁾、均一化が一段と進む後期前葉段階の後期群集墳の前段階として評価できよう。

4 初期群集墳の盛衰について

中期中～後葉に盛行した群集墳で以後、それに匹敵するような副葬品をもつ古墳がみられなくなる一方で、付近に新たに展開を始める古墳群のなかには最新の埋葬施設である横穴式石室をもち、豊富な副葬品をもつ古墳が出現する。小谷古墳群より南に展開する天保古墳群の1号墳¹⁷⁾はT K 10段階の径15m

程の円墳にもかかわらず、横穴式石室から剣菱形杏葉を始めとした馬具や刀装具、胡禄など豪華な副葬品をもつ。未調査墳の2号墳は方墳で1号墳より古い古墳である可能性があるが、他の5基は7世紀前葉～中葉に築かれたものである。また、天花寺丘陵の北西の先端部には前期から中期中葉まで古墳が築かれた西野古墳群において横穴式石室をもちf字形鏡板付轡や雲珠など、豊富な副葬品をもつ5号墳が出現¹⁸⁾する。

小谷13号墳の被葬者は、中期中葉にこの地域で、首長級とはいわないまでも、勢力を誇った者とみられる。しかし、11号墳以降の家族墓的な様相が強い古墳と比較すると、伊勢における出現期の横穴式石室をもち、豊富な副葬品を有する西野5号墳や天保1号墳の被葬者の優位性が際立ち、その格差は明白である。

また、八重田古墳群の場合もT K 47段階以降、副葬品の内容・量とも16号墳を凌駕する古墳はみられない。一方で、八重田古墳群が造営を停止する前後のT K 10段階前後には古墳群の所在する阪内川左岸の対岸に竪穴系横口式石室をもち、胡録金具など豊

富な副葬品をもつ浅間古墳群が展開¹⁹⁾していることから、横穴式石室をもつ小型墳の被葬者の優位性が看取でき、先の事の傍証となろう。

つまり、中期末葉から後期前葉にかけては、古墳の築造数が格段に増加し、新たに展開をはじめると古墳群が出現するが、これは、古墳の築造が首長層といった社会的に上位のものに限定されていた段階よりその規制が緩和され、古墳がより下位のレベルの集団にまで浸透したことを示すものと解してよからう。そして、同時に、最新の墓制である横穴式石室を採用している古墳では、木棺直葬墳よりも豪華な副葬品をもつ傾向があり、これらの被葬者の優位性が看取できる。反対に一貫して横穴式石室を導入出来なかった古墳群に関しては早い段階で造営を停止していることから、当該期には横穴式石室に葬られた被葬者が台頭する一方で、中期中～後葉に勢力を誇っていた集団は、横穴式石室という最新の祭祀形態を導入できずに造営を終了している。それは、被葬者の社会的地位の没落を意味すると考えられる。

以上のように初期群集墳のなかでもその被葬者の性格は一樣でなく時期により変化していることを指摘してきた。中南海域における初期群集墳の動向をまとめると以下ようになる。

中期中～後葉...墳形は方墳が主流であるが円墳もみられる。主体部は木棺直葬で、非実用品とみられる須恵器を使用した祭祀がみられる。古墳群のなかで副葬品の内容や埴輪の使用などで古墳間に格差が存在し、小型墳であるにも関わらず鉄製品など豊富な副葬品をもつ核となるような古墳が存在する。中期の首長墳の小型版といった要素が強い。

中期末葉...墳形は円墳に転換し、古墳間の格差が存在する例もあるが、甲冑などの武具・武器の副葬は減る。副葬品などで突出した要素をもつ古墳はみられなくなる。埴輪の樹立例が格段に増加する。小型墳の築造数が格段に増加し、古墳の築造階層がより拡大する。低地部の微高地にも古墳群が築造されるようになる。

後期前葉...中期末葉～末葉にかけて造営を開始した古墳群がこの段階に造営が途絶える一方で新たに築造を開始する古墳群が増加する。伊勢において初現期の横穴式石室を埋葬施設とし、豊富な副葬品をも

つ古墳が出現する。木棺直葬墳については、古墳間の格差は少なく、より均質化が進行する。墳形は円墳が主流となる。

このようにみえてみると、小型墳の築造が少ない段階で、豊富な副葬品を有している中期中～後葉段階の小型墳群の突出性が抽出でき、後に築造される古墳とは隔絶があるといえる。

5 初期の群集墳成立の背景

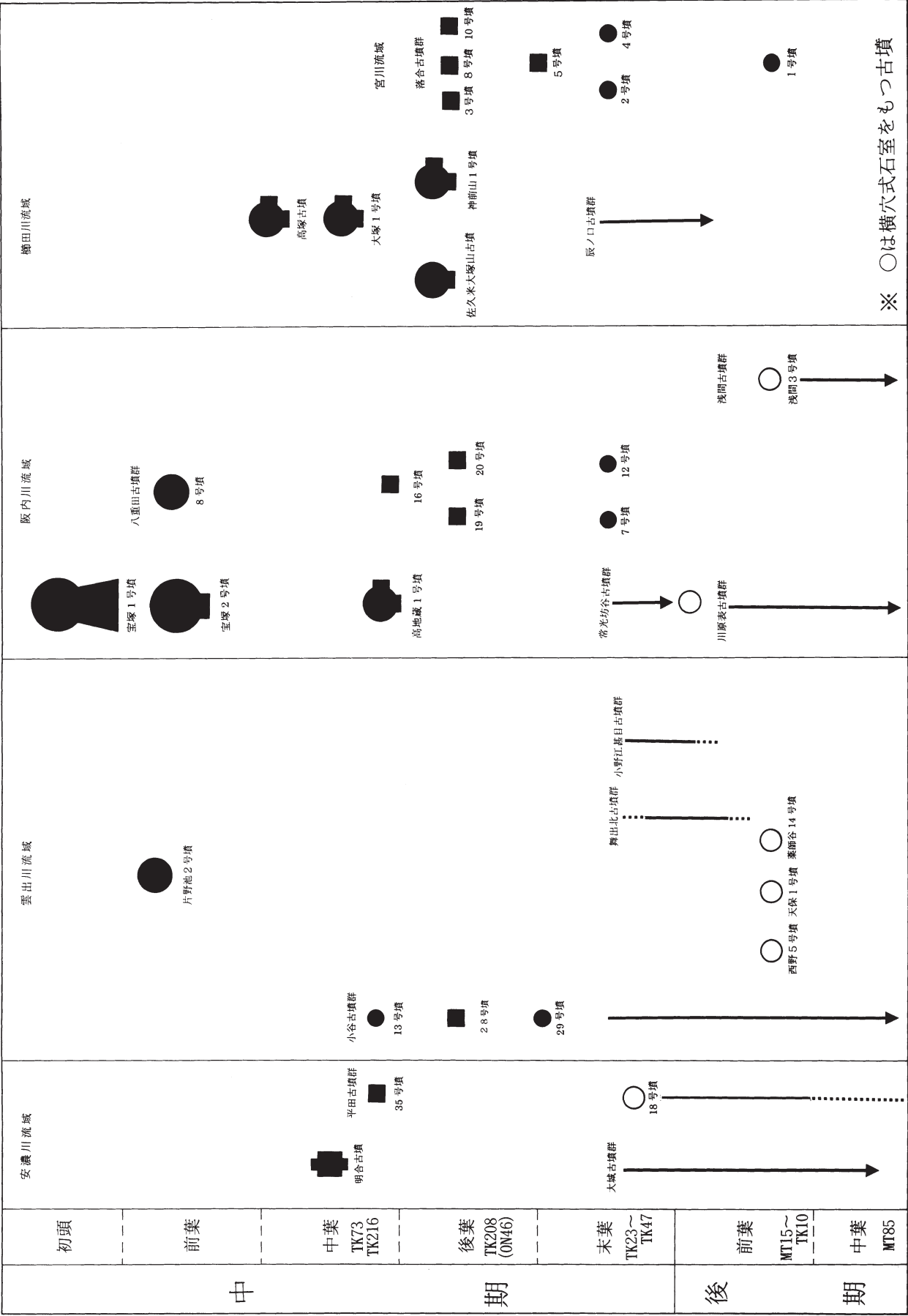
それではこのような小型墳群の発生を促した要因は何であろうか。ここでは天花寺丘陵周辺の動向や中南海域の首長墳の動向などから、その発生の契機について検討する。

a 天花寺丘陵における小谷13号墳

小谷13号墳の所在する天花寺丘陵周辺では前期に前方後方墳が相次いで築造された地域として知られるが、中期に入ると片野池1号・2号墳の築造以後は主だった首長墓がみられず中小の古墳に限られることから地域勢力が低迷することが伊勢野久好氏らによって指摘²⁰⁾されている。

しかし、天花寺丘陵では中期以降、前方後円墳を始めとした大型古墳が築かれることはないものの天花寺丘陵を中心に中小の古墳が非常に多く築かれており前期以来の勢力が存在していたとみられる。小谷古墳群では各支群においてT K 216～208段階前後から古墳が築造されており、小地域首長や特定の家系などが分立しているような状況であったと考えられる。そのなかでも唯一円墳を採用し、豊富な副葬品を有する小谷13号墳の被葬者は、そのなかで最も勢力を有した存在であったと考えられる。

小谷13号墳の位置する天花寺丘陵は、大和から宇陀地方を越えて東国にむかうルート上にあると考えられ、古代より大和からの文化が流入している地域である。大和地方における武器を出土した群集墳の分布は奈良県の東南部に偏ることが和田晴吾氏らによって指摘²¹⁾されており、豊島直博氏は、中期後葉に展開する群集墳から出土した武器を検討し、「中期中葉から中葉にかけて大型の古墳が認められない宇陀地方に、武器をセットで副葬する初期群集墳が数多く分布することは、中央政権が有力な首長が強固な支配体制を形成していた地域を避け、政治的、軍事的介入の容易な地域を選んで軍事組織を形成し



第107図 中 南勢地域の大型墳の消長

たことを示唆している」と指摘²³している。軍事組織が存在したか否かは別にして、このような大和地方の群集墳は、目立った首長墳のみられない地域に分布が集中し、武器が豊富に副葬されている点で伊勢の中南勢地域の例と共通している。分布に偏りがみられることは林部均氏が指摘²³するように、政治的な産物である可能性があり、中期に主だった首長墳が築造されない嬉野地域はまさに宇陀地方と共通の背景をもつことから、豊富な副葬品をもつ小谷13号墳の出現は嬉野地域が中央政権の影響下にあったことを想起させる。中央政権にとって東国への重要ルート上に位置する宇陀・一志地方は掌握しておくべき地域であったであろうし、伊勢地域の他の初期群集墳に先行して円墳を採用している点、以後も西野5号墳や天保1号墳といった豪華な副葬品をもつ古墳が点在し、釜生田・上尾戸古墳群など畿内系の石室がいち早く導入されていることなどから、主だった大型古墳が築造されていないに関わらず、伊勢地域のなかでも、近畿地方との親縁性が色濃くみられる地域でありその可能性は十分に考えられる。

つまり、中央政権は、東国に進出するルート上に位置する宇陀地方から嬉野地方にかけての地域を重要視していたと思われ、初期群集墳の被葬者に対し何らかのかたちで接触をもったと考えられる。しかし、埋葬施設が木棺直葬であることや、伊勢型の系譜を引く二重口縁壺や壺形埴輪の採用をみる限り、前期以来の伝統に執着していることが窺え、特に埴輪の祭祀に関しては畿内の情報は希薄であり、独自性の主張がみられる。これらの要素を重視するならば、中央政権側からの積極的な関与が窺えるものの、その支配形態は絶対的な権力を行使するようなものではなく、在地勢力の古墳祭祀に干渉するほど強い集権性は有していなかったと考えたい。

b 中勢地方

平田35号墳が築造された安濃川流域では中期初頭に明合古墳が築造された以降、首長墳ともいえるべき古墳はみられない。平田古墳群の造営のピークは7世紀代であり、35号墳が築造されてから6世紀までは、累代的に古墳が築造されている。安濃川流域では渡来系の文化の流入が顕著に認められる地域であり、他の地域とは異なった様相を呈する。平田35号

墳に関しては新たに台頭した勢力の出現が考えられるものの、副葬品などをみてもこの段階では渡来的な要素は薄く、渡来系の人物の墓とは考えにくい。

c 南勢地方

南勢地方では中期初頭に伊勢地域最大の前方後円墳である宝塚1号墳が築造されるが、これに後続する大首長墳は姿を消し、変わって造り出し付きの円墳が築造されるようになる。特に、中期前葉頃には宝塚古墳群のある阪内川流域から玉城丘陵や櫛田川右岸の沖積地へと大型古墳の分布の主体が移動する。これらの動きは宝塚1号墳の首長を中心とした支配体制の崩壊を意味し、南勢を統轄した勢力が分裂したと考えられる。

そしてその後、櫛田川右岸の勢力が優勢となったあとも阪内川の首長墓は途絶えておらず、八重田16号墳を中心とした小型の方墳群が築かれる中期後葉段階でも、南東には高地蔵1号墳という造り出し付きの円墳と、方墳で単独墳である弥三郎新畑A古墳がそれぞれ築造されている。従って八重田16号墳を中心とした小型の方墳群の被葬者については、新興勢力や首長に対抗した集団とするよりは、これらの首長のもとで何らかの職掌を担った集団の墓と考えたい。また、宮川右岸に位置する落合古墳群は、周辺地域の状況が不明であり検討の材料に乏しいが、周辺に主だった首長墳がみられないに関わらず、中期後葉に小型の古墳が群をなして築かれる。小型墳でありながら3号墳のように蛇行剣など豊富な鉄製品を有しており上部権力と何らかの関連を有していたことが想起される。

おわりに

以上のように小谷13号墳をはじめとした中期後葉に築造される初期群集墳について様々な要素から比較・検討を試みた。その結果、中期後葉段階では副葬品や祭祀形態が比較的共通しているほか、副葬品などの格差、埴輪の使用の制限といった要素がみられ、小型墳の被葬者が勢力を伸張する一方、上部権力との関係を有していたことが想定でき、古墳に葬られる階層がより下位のレベルにまで拡大した中期末葉に築かれる群集墳、展開する古墳群が一変する後期前葉の群集墳とは区別する必要があることを指摘した。

また、中期中～後葉に築造を開始する古墳群は後期前葉になると衰退し造営を停止する一方で新たな場所に展開を始める古墳群が出現する。初現期の横穴式石室をもち、豪華な副葬品をもつ小型墳も出現するなど、これらの集団の優位性が窺える。小型墳の被葬者層と上部権力との関連性については、その関係は一時的なものであって、政治的変動などの要因によって、地域の支配体制は、その都度再編され、上部権力と関係を有した集団は絶えず変化していた可能性が高いと考えられる。

このような古い段階の群集墳の具体的な被葬者像については、まだまだ不明な点が多い。墳形・群構造・埋葬施設・副葬品・葬送儀礼といった諸要素を総合的にみた分析が必要である。とりわけ、同一の墓域内に築造されていても、同じ系列の集団によって造墓されたものとは限らないと考えられ、時期を隔てて築造されている群集墳の分析の際は被葬者集団の性格について注意する必要がある。

また、本稿では被葬者の性格の変質に主眼をおいたため群集墳のなかでも中期中～後葉に開始されるものと中期末葉・後期前葉から開始するものとに区別して検討を進めた。各地に展開を始める群集墳はその埋葬形態は多様であり、その築造の背景と被葬者の性格は一樣ではないものと解される。古墳群の成立過程を探る上でその被葬者像については重要な問題であり、今後検討が必要である。

〔註〕

- (1) 本稿における初期群集墳の定義については「木棺直葬を中心とし多用な埋葬施設をもち、古墳時代中期中葉から後期前葉にかけて築かれる小古墳」とし、やや狭義の意味で用いていることを注意されたい。また、このような中期中葉以降の小型墳の評価については石部正志氏、白石太一郎氏らの研究が挙げられるが本稿ではこのような小型墳群を政治的な産物であると捉えるため「初期群集墳」の呼称を用いる。
- (2) 東海考古学フォーラム『古墳時代中期の大型墳と小型墳』2002年
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店 1981年）
- (4) 竹内英昭『南勢地域の群集墳』（『立命館大学考古学論集』立命館大学考古学論集刊行会 1997年）
- (5) 平成14年度に行われた第8次調査にて丘陵北の尾根上に2基の未確認の古墳が発見された。28号墳は方墳で29号墳は円墳である。28号墳からは鉄剣、鉄鏃、29号墳からは周溝より埴輪が出土した。築造時期については28号墳は墳丘から出土した須恵器よりTK208段階、29号墳に関しては出土した埴輪から28号墳よりやや下るとみられるが時期差は少ないとみられる。三重県埋蔵文化財センター『平成14年度三重県埋蔵文化財センター年報』2003年

- (6) 伊藤秋男他『平田古墳群』（安濃町遺跡調査会 1987年）
- (7) 下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告書』（松阪市教育委員会 1981年）
- (8) 伊藤裕偉『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告第7分冊 落合古墳群』（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1992年）
- (9) 註(8)に同じ
- (10) 森泰通『東海地方における5世紀後半の様相』（『渡来文化の受容と展開 - 5世紀における政治的・社会的変化の具体相（2） - 』第46回埋蔵文化財研究集会 1999年）
- (11) 和田晴吾『群集墳と終末期古墳』（『新版古代の日本』第5巻 近畿 角川書店 1992年）
- (12) 楠本哲夫『六文銭以前』（『同志社大学考古学シリーズ 考古学と生活文化』1992年）
- (13) 下村登良男『神前山1号墳発掘調査報告書』明和町教育委員会 1973年
- (14) 下村登良男『弥三郎新畑A古墳』『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1990年
- (15) 川畑由紀子『舞出北遺跡』（『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報X』三重県埋蔵文化財センター 2001年）
- (16) 中期末葉の小型墳については、北勢地方でも石葉師古墳群など類例が確認されている。
- (17) 前川嘉宏・野田修久『天保古墳群』（『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊3 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991年）
- (18) 伊勢野久好編『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会 1991年）
- (19) 福田哲也・福田昭『浅間古墳群発掘調査報告書』1995年
- (20) 註(8)に同じ
- (21) 註(11)に同じ
- (22) 豊島直博『古墳時代中期の畿内における軍事組織の変革』（『考古学雑誌第85巻 第2号』2000年）
- (23) 林部均『群集墳とヤマト政権』（『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』吉川弘文館 1999年）